

2023年 戦争体験を語り継ぐ集い

＜第30集＞戦時体験記録集

いつの世も 誰もが平和を 望んでいる

それなのに 世界中を巻き込んだ 戦争は 終わらない

グローバル社会となった今 身近な問題だ

何ができるのだろう

戦争体験を語り続けることが

身近な平和や命を守る一助になりますように



戦争になると 人が人ではなくなります 命が命ではなくなります

はじめに

◇「戦争体験を語り継ぐ集い」とは

名古屋市緑生涯学習センター主催の事業です。進行は「戦争体験を語り継ぐ会」が担当し、行政と市民が協働した取り組みを続けています。

戦争を知らない、のちの世の人たちのために、戦争が始まった時の現実はどうだったのか、戦時中の暮らし、軍隊生活の実際、危険と隣り合わせの毎日を過ごさなくてはならない、厳しい現実になることを、伝えています。戦争の悲惨さを伝えることで、平和と平和を守る大切さを、考えていただける機会にさせていただくことを願っております。また、体験者ご自身に直接語っていただくことの重みを大切にしています。命の大切さ、平和のありがたさへ思いを馳せる機会になることを願いながら、毎年開催しています。

◇戦時体験記録集について

実際に戦争を体験された方が投稿して下さる可能性は著しく減りました。高齢になられ、聞き取りも難しくなっている現状です。今年は体験された方が残された著書から、記録集へ掲載させていただいた原稿もあります。ご協力をいただきましたことに感謝申し上げます。変わらぬ平和への願いを込め、二度と悲惨な戦争を繰り返さないために、平和の礎の一助となれば嬉しく思います。この冊子を手にとってくださる皆様から、平和への祈りが広がりますように。

◇戦時体験記録集の歴史その2

長年紡いできた記録を残す活動として「戦時体験記録集」の制作を続けています。昨年より、もう少し踏み込んだ内容にしています。記録集変遷の裏側や毎年の打ち合わせ会での様子、橋詰四郎さんの言葉、「戦争体験を語り継ぐ会」としての活動も記録しています。そして今「戦時体験記録集」第1集から現在までをまとめて記録に残すという取り組みを始めています。試行錯誤の作業ですが、皆で協力して進めています。完成の暁にはお手にとっていただければ嬉しいです。

「戦争のない平和な世界を！」今年もご賛同くださいました皆さまのご協力により、戦時体験記録集が完成いたしました。感謝申し上げます。

戦争体験を語り継ぐ会 一同

※ 記録の中に含まれる表現に関しては、差別を助長するものではありません。

第34回『戦争体験を語り継ぐ集い』プログラム

令和5年7月29日(土) 10～12時

1. 開会の挨拶
2. 緑生涯学習センター堀田館長より
3. 語り継ぎタイム(1)

・橋本克巳さま (P1)

休憩

4. 語り継ぎタイム(2)

・江間万里子さま (P3)

・福岡友一さま (P3)

5. 閉会の挨拶

＜第30集＞戦時体験記録集

◆目次◆

語り部タイム

－ 満蒙開拓団 － ひとり生き残って

10歳の絶望から平和の大切さを伝え続ける

ピースあいち語り手の会 会員(橋本克巳) - - - - - P1

戦後にも禍根を残す

戦争体験語り継ぐ会 会員(江間万里子) - - - - - P3

昭和のくらしと戦争

戦争体験語り継ぐ会 会員(福岡友一) - - - - - P3

2022年語り部タイム記録

電話が太平洋戦争でどのように活用されたか!

戦争体験語り継ぐ会 会員(緒川文子) - - - - - P5

展示品の説明(会員) - - - - - P7

『“兵士の子どもたち”の体験をも語り継ぐ』

－戦争体験者の経験が世代を超えて及ぼす影響とは－

(西山浄土宗慈雲寺住職・旅行ライター 宮田随麗) - - - P9

戦争体験に触れて

－『死の転進』豹兵団輜重兵第30聯隊の記録－

豹12032部隊戦記編集委員会 発行

戦争体験を語り継ぐ会 会員(須原敏行) - - - - - P15

豊川海軍工廠跡の戦争遺跡の見学会

戦争体験を語り継ぐ会 会員(大橋公雄) - - - - - P26

戦争体験を語り継ぐ集い

戦時体験記録集の歴史その2 - - - - - P29

2023年 語り部タイム

- 満蒙開拓団 - ひとり生き残って

10歳の絶望から平和の大切さを伝え続ける

ピースあいち語り手の会 会員 橋本 克巳

- ・満州開拓団とは
国民が生き延びるための国策として
貧しい農村から豊かな生活へ
- ・呼び掛けられた「夢の開拓団」
土地20町歩（東京ドーム4～5個分）無償供与
兵役免除
- ・東三河開拓団として入植したら「青田接種」の土地だった
「侵略者の子」だと忘れられない忘れない
- ・収穫の喜び
豊かな土地からの収穫は開拓の苦労を忘れさせる
- ・父は招集された
母の嘆き「開拓は頓挫した」
- ・敗戦からの地獄絵図
敗戦国の国民の逃避行と悲劇
多くの悲惨な状況を目の当たりにして
- ・7人家族はたった一人になった
泣くこともできなかった家族との別れ
祖母、弟、妹が順に亡くなる
やがて同日1時間のあいだに父と母の死

- ・戦争孤児として帰国
思い出したくない体験を封印する
- ・80歳の決断
二度と戦争をおこしてはならない
自分と同じ経験をする人を出してはいけない
- ・平和の大切さを語り継ぐために
ピースあいち語り手としての活動
今、私が伝えたいこと

参考資料

開拓軍および義勇軍送出者数

順位	県名	開拓団員	義勇軍	計
1	長野	31,264	6,595	37,859
2	山形	13,252	3,925	17,177
3	熊本	9,979	2,701	12,680
4	福島	9,576	3,097	12,673
5	新潟	9,361	3,290	12,651
43	愛知	634	1,724	2,358
	全国計	220,359	101,514	321,873

愛知県開拓史 通史編より

東三河郷開拓団人員構成表

団員個数	146戸
総人数	549人
応召者	99人
応召死亡者	22人
残留者	28人
生還引揚者	252人

「愚かなる者の旅路」 瀧川辰雄
総理府嘆願書より 昭和46年調



戦後にも禍根を残す

戦争体験語り継ぐ会 会員

江間 万里子

私は助産婦（現在の助産師）を仕事に選んだ。それは3つの理由からだ。父が豊川海軍工廠跡の爆撃で戦死していること、その後の生活は母と共に苦労したこと、助産婦なら母の助けになれると思ったこと、これが助産婦を目指した理由だった。

戦後のいつ頃だったか、助産婦を続けている時、医師会がやっている電話相談に参加していた。相談員として、医師、看護師、助産婦が担当していた。

ある日、医師から「何処の看護師学校か？」と聞かれて「日赤です」と答えた。「僕は、日赤の看護師は嫌いだ」と言うので、理由を聞くと「戦争中にケガや体調が悪いときに、軍隊の指示に従ってけが人を放置し、去って行ったから嫌いだ」と。

戦時中、日赤は軍部と一体となって戦争に協力していたことは事実である。今でも其の体質が残っていて、皇居の行事等には日赤が引き合いに出される。今後、日本がアメリカの戦争に巻き込まれ、従軍看護師として日赤が引き合いに出されるようなことがあってはならないと思う。



昭和のくらしと戦争

戦争体験語り継ぐ会 会員

福岡 友一

1940年（昭和15年）、国中が紀元2600年の祝賀で、大さわぎでした。翌、昭和16年、小学校が国民学校に改革され、私は第一回生で入学しました。同年12月8日朝、突然全校生が運動場に集合させられ、大本営発表のラジオを聞かされました。米英と戦争に突入し、我軍がハワイにて、米艦隊に全滅的な損害をあたえたとの報道でした。

大戦果に日本国中が大喜びでした。

しかし、翌日から大変の始まりでした。店から食料品等すべての商品がなくなり、商品が配給制になったのです。

日を追って品が不足し、米も月3日分程の支給になりました。道路側や校庭までも耕して、大豆、イモ、むぎ、カボチャを植え、食料の代替えとしました。三度の食事には、大豆カス、トウモロコシ、カボチャと米が数える程入った湯ばかりのスイトンでした。

また、当時の遊びは、缶ケリやガラス玉入れ、兵隊将棋、厚紙切りショウヤ、縄跳び、花一匁、手まり、お手玉等で遊びました。

有松は都心から離れているため、上空に100機編隊規模のB29を眺めているだけでした。空襲警報になると全校自宅待機でした。防空対策もあり、桶狭間小学校の地に照空灯や、笠寺（今の桜台高校の地）に高射砲がありました。一万メートル【上空】を飛ぶB29をねらって発射する砲も、八千メートルまでの射程距離のため、B29へ届くことはありませんでした。】

空襲で一番の印象は、愛知時計です。軍情報の誤りで警報が解除され、現場に戻った作業者がB29から爆弾攻撃を受けて、全作業者が犠牲になりました。青函始め工場の用品が風に乗って有松まで飛来してきました。また、今のパンテリンドームナゴヤに飛行機のエンジンを作る大工場がありました。灯火管制で真っ暗闇なところに、照明弾で照らされた工場を爆撃され全滅しました。その照らされた光が有松からもよく見えました。

戦争が始まった理由は、狭い国土を拡大しようとした軍部が中国へ進出し、それを阻止しようとした米軍でした。当時の米国は世界一の産油国で、日本は全て米国からの輸入に頼っていました。国力の差を一番知っていた山本五十六大將が、皮肉にも開戦の最先端に立たされ、短期で戦争を終わらせようとして、奇襲攻撃を企てハワイを攻撃しましたが、逆に米国民の戦意統一を固めた結果となりました。



2022年 語り部タイム記録

電話が太平洋戦争でどのように活用されたか！

戦争体験語り継ぐ会 会員 緒川 文子

＊当日は写真を見せながらのお話で、文章だけでは伝わりにくい部分があります。ご了承ください。

こんにちは。緒川文子（おがわふみこ）と言います。緑区に住んでいます。私は電話交換手でした。電話交換手って分かりますか？今の有松郵便局などに電話交換というのがあり、緑区は有松と鳴海と大高、3つの電話番号があったんです。「有松へお願いします」「大高へお願いします」と言って、さらに遠いところでは名古屋を中継して日本全国どこでもつながります。名古屋の中区やいろいろなところへもかけたんですね。

電話交換という、皆さんがぐるぐると回すと写真を指さして、これがパタッと落ちて、「何番の人が掛けてきた」と思うと、ここへ、コードを差し込んで、「はい、何番へ」と。Tさんなら「Tさんのところへお願いします」と言うのと、何番で繋ぐわけです。そうするとお話しできる、そういう電話があったんですね。有松は、商売で初めに何軒かが電話を引いて、それから大きくなって有松、大高、鳴海というふうに広がっていました。

電話交換の人たちが戦争中に、爆弾が落ちて来る中でどうやって電話を守ったかということをお話したいと思います。

電話というのは大事なもので、昭和の初め頃から出てきました。私も小さいときは爆弾が落ちて来ました。有松にも3発、本当に怖い目に遭いました。

昭和12年、今から80年ぐらい前、太平洋戦争の頃、本当に重要な戦力として電話が使われました。名古屋にも中電話局がありました。戦争中は、中電話局なんかには地下に電話局が設置されて、軍用通信は、この電話を守る使命で、プレストを離すことはできませんでした。みんな地下で話をされていました。この戦争当時、先輩たちがどんな思いでこの電話を守り抜いたか、焦点を当ててお話ししたいと思います。

私たちの先輩も、火の中で「どんなことがあっても通信を守る、電話を守る」使命なので、プレストを離すことはできず、そのまま亡くなるんです。爆弾が落ちた交換台の前で亡くなることもしょっちゅうあったということです。『ガラスのうさぎ』で高木敏子さんが、「半年早く戦争が終わっていたら、東京の惨事はなかったんじゃないか」と言われていました。サハリンでは「真岡の集団自決」ということもありました。8月20日、戦争が終わっているのに、全員が集団自決で「さようなら、さようなら」と言って交換台の前で亡くなりました。



戦争が激しくなると勤労動員というのが始まって、いわゆる挺身隊です。200人近い彼女たちは、14歳ぐらいからセーラー服にモンペを履いて、血液、住所、氏名、学校名を書いた布を胸にかけ付けて学校に行っていました。電話交換手は鉢巻を締めて交換台で一生懸命働いていました。

写真を見せながら、これはそのときの、女子挺身隊の体操をしているところです。それから、交換手、17年から18年頃の電話交換がこうやって並んで、仕事に入る前にこうやって（体操を）並んでやりました。

写真を見せながら、これは当時の電話交換台のところです。皆さん、よく見てください。みんな鉄かぶとを背中にしょって、爆弾が落ちてきても「死んでもプレストを離さず通信を守る」と教えられ、鉄かぶとをかぶって交換台で通信をつないでいる仕事をしている風景です。

これは交換手の検閲をする憲兵です。憲兵というのは、みんなを監視する人です。この人たちが来て検閲をしました。

局の屋上です。亡くなった方たちがバルコニーに並べられています。挺身隊とか、学徒の人たちが死亡したのがすごく多くなり、ここの局の屋上に並べていた状態の写真です。

電話も兵器ということで、資材がだんだん無くなってくると全て供出させられて、各家庭の電話機もみんな供出、お国へみんな提出するんです。個人の電話機でも。電話も全てこういう状態でいきました。通信敢行に馬も一役買っていました。

以上、こういうもの（写真）がたくさんありますけど、このような生活の中で日本は戦争をやってきたということです。

私は、物質だけでなく、社会にも人間性も世の中も全て破壊しつくすのが戦争だと思います。ただ、国のためを信じて、猛火の中でプレストとともに散った先輩たちを思うと、もう戦争は要らないと叫びたいと思います。今、私たちがこういう戦争体験を話していくというのがどれ

だけ大切かということを私はつくづく思います。

その当時、電話局の方たちがどういふに電話交換をやっていたのか、電報配達も、赤い自転車に乗る男性がいなかったので、女性が電報配達をしたこともありました。

私は戦争体験を通じて、本当に戦争はやるべきではないと思っています。

【訂正】司会の発言

「プレストとは、つなぐコードのついたスイッチ」と説明しましたが、「ヘッドホン」のことです。お詫びして訂正いたします。

* 有松の捕虜収容所について *

有松には捕虜収容所がありました。去年は紙芝居をしていただき、記録集にも載っています。ご要望があれば連絡してください。子ども会や学校で戦争を知りたいということであればぜひお繋ぎいただきたいと思います。

展示品の説明

戦争体験語り継ぐ会 会員

吉井弘和・関谷敏夫・緒川文子

【吉井弘和】

今回の展示の一つは、戦争中の昭和19年12月のもので、名東区の「ピースあいち」のご協力で、パネルを貸し出していただいたものです。昭和19年12月、翌月の1月に連続して大きな地震があり、12月は三重県沖で東南海地震、76年前に東南海地震があったんです。それから1カ月で三河地震、2つの地震でたくさんの方が亡くなったんです。けれど、12月7日のことで、12月8日に真珠湾攻撃があり特別な日だったので、新聞は地震の



ことは隅っこにちょこっとしか伝えなかったんです。当時は報道管制で、紙面は全部検閲され、ほとんどの人が知らないような状態です。東南海地震と三河地震は、日本よりも外国の人が知っているぐらいでした。ワシントンポストでは世界初で報道でした。死亡者の人数も、3・11の地震の規模と大して変わらず、東南海で1万2千人の死亡、三河地震で9千人の死亡というぐらいにしか公式発表がなかったんです。どうなっているのかも分からないぐらい、あまり被災者も大事にされなかったという内容のパネルです。

【関谷敏夫】

ここにある薬莢（やっきょう）、これは名古屋城に戦争中に落ちていたのを、ある方が集めて、家にいっぱい持っていたんです。ほかにも、B29の残骸とか、ぜひもらってほしいということで。ここの中に火薬を入れて、5連発なのかな。その人の親父さんが名古屋城の、兵隊（兵站）のときに集めて、それをもらってきました。B29の残骸などはピースあいちにプレゼントしたり、皆さんにあげたのでこれだけです。名古屋城、3連隊というのがあって、亡くなったご主人が集めたけれど、十何年も経って、皆さんに戦争のことを知ってほしいということで預かってきたものです。

【緒川文子】

これは、恩賜の煙草です。父が太平洋戦争の戦争を喚起するということで、マラソン王日比野寛（かん）が熱田神宮から東京まで走るということがありました。うちの父は変わり者で、郵便局の前でおまんじゅうを作っていたんですが、マラソン王の人たちが東海道を走っていくを見て、自転車を持ってその人たちについていっちゃったんです。それで着いたのが知立、自転車をほうかって、そのままついて東京まで走っていったそうです。東京まで走ったもんだから、この「恩賜の煙草」をもらったのです。一本一本に天皇の紋章が付いていて、みんな1箱ずつもらえたみたいで、父は家宝にしているんです。そういう思い出のある煙草、昔はきれいな白でしたが。



『“兵士の子どもたち”の体験をも語り継ぐ』

一戦争体験者の経験が世代を超えて及ぼす影響とは一

西山浄土宗慈雲寺住職・旅行ライター 宮田 随麗

私は桶狭間にある慈雲寺という小さなお寺の住職をしております宮田随麗と申します。

私は今年71歳、ベビーブームの一番最後ぐらいの年齢、その人たちは、ほとんどが戦争から帰ってきた人の子どもです。ということは、人間を殺した経験のある人の子どもということです。戦争だったから、国のため、正当防衛、敵が攻撃してきたから、いろんな理由はあるでしょう。しかし、理由の問題ではないんですね。私の父親は人間を殺すという恐ろしい経験をした人です。その人に私は育てられた、兵士の子どもです。

この頃よく耳にするPTSD（心的外傷後ストレス障害）という言葉、戦争、災害、レイプなども含め、命の危険にさらされた経験が、長く私たちの心に深い傷となって残るというものです。この研究が進んだのは、ベトナム戦争から帰ってきた兵士たちが、長い間深刻なストレスにさらされ、大きな社会問題になっていたことが分かってきたからです。

第二次世界大戦を経験した兵士たちのPTSDに対しては、戦中も戦後すぐにも、幾つかの研究が行われています。戦争体験がどのように心の傷になっていったかという調査です。対象になった人は調査を受けたこと自体をけして語るなどと言われ、ほとんどの事実が隠蔽された状態でした。

ですから、私たちの父親の世代、第二次世界大戦で戦った世代がどのような心の傷、心の荷物を背負って帰って来たか、その傷をそのまま経済戦士として次の戦いに向かった人たちも多いのでは、と思っています。

私の父は、大正12年生まれです。父の詳細はレジュメ（2022年戦時体験記録集掲載）に詳しく書きました。戦争に行ったのは20代の初め、もう戦争が終わりに近づいた頃です。インドネシアに行き、そこで予備士官学校に入りました。その頃インドネシアはもう末期状態になっていて、指揮を執る士官レベルの人たちがどんどん死に、若い急造の下士官、士官が作られていったんですね。父も多分21〜2歳だったと思うんですけど、士官学校を出て少尉に任官されて小隊長になりました。

体験もほとんどない若造が指揮を執っていった、これが現状でした。父は戦後、しばらくは日本に引き揚げてきませんでした。どうやらいろいろ大きな問題があったみたいなんです。

私が子どもの頃、父は全く笑わない人でした。機嫌が悪いわけでもないし、かんしゃくを起こすわけでもないけれども、声を上げて笑ったのを聞いたことがありませんでした。父は私たちをいろいろなところに連れていってくれたりして、最初の「家族でお出かけドライブ」世代です。父は免許を取り、クラウンを買い、家族でお出かけをしました。私たちは東京で、父は広島山奥の出身、母は東京に300年ぐらい住む家の人間、田舎のお兄ちゃんがシティーガールと結婚しました。父はその当時流行り始めたことを全部やり、家族でお出かけ、白木の家具など、都会に憧れた人がやることを全てやりました。家族でお出かけをとて



も強調しました。ところが、家族でお出かけの最後の方になると、父はいつも寡黙になっちゃうんですね。最後の最後になると、なんか「自分が幸せじゃないか」みたいなのが戻ってくるんですかね。すごく変な感じでした。私は父のそういう態度、父が笑わない、あまり口をきかない、でも私たちのことを嫌いではなさそう、なのになんで？と。心が通じない感じがとっても辛かったんですね。



ある日父の実家に行きましたら、父が大声で笑っている、父が大口を開けて笑っている写真がたくさん出てきたんですよ。祖母たちは、「マサオ（父）は笑い上戸だったからなあ」と。私はそれがすごくショックだったんですね。なんで父は私たちに笑わないんだろう？

1歳ぐらいになった私を抱えている父の写真、唯一父が笑っています。この写真を見ると泣きなくなっちゃうんですけどね。私はこの写真があったから救われた、父は私が生まれたことを少なくとも喜んでいて、この写真で分かります。どうぞ、親子で笑っている写真をたくさん残してくださいね。これはとっても大事なことで、気持ちが落ち込んでいる時でも、私は望まれて生まれてきたんだというこの唯一の証拠なんです。

父を理解しよう、父の心を開こうというのが、私にとっても母にとっても、とても大きな問題で、恐らく、結婚した相手の母にとってはなおさらでした。とうとう母は35歳の時に鬱病になってしまいました。父



のことが母の病気の主な原因だったかどうかは分かりませんが、父が初めて私と母親の前で「家族でいてくれてありがとう。何もお前たちが変わってほしいとは思っていない」と言ったんですね。それから母は鬱病が治り始めましたから、父との関係が大きな問題だったんだろうと思います。

私は父が抱えているものにとっても興味があり、戦争というのにぶち当たり、父が抱えているもの、父が笑わない原因は戦争にあるというふうに思いました。ちょうど私は 70 年安保の学生運動真っただ中の時代に大きくなりました。東京の千代田区で育ち、千代田区の中学生はちょっと生意気で、中学時代からデモに出かけている子供がたくさんいました。その頃に、2・11、2月11日の建国記念日が制定され、それに対する反対運動は、中学生や高校生も、むしろ東京の中高生が中心になって反対デモが行われていたぐらいです。

それにかぶれていった私は、父に「あなたは何をしたのか」と聞き続けたんですね。父は決して弁解はしませんでした。一言言ったのは、「あれ以外に選択の余地はなかった」「戦争に突入する以外に選択の余地はなかった」。それから私は、なぜ反対しなかったのか、あなたのような知性的な人がなぜ戦争に兵士として出かけたのかと責め続けました。それに対し父は「あれ以外の選択はなかった」と言い続けたのです。



でも、一回だけ「戦争では誠実な人間から死んでいく。生き残った人間は何らかのズルをしたからだ」と言いました。そのときまで私は父が戦争中の行為を自分で合理化している人みたいに思っていたんです。しかし、そのとき初めて私は、父が自分をどう認識していたか、自分がやってきたことをどう認識していたか、ということに気が付いてしまったんです。

戦争は誠実な人間から死んでいく、これは戦闘状態の兵士だけではなく、爆撃を受けたときの避難、そういうときもそうだったろうと思います。食糧の奪い合い、いろいろなことがあって、そのことを父は忘れられなかったし、忘れられない人は山ほどいるはずです。むしろ、すっかり忘れてしまって「あれは戦争だったんだからしょうがないよ」と気楽に自分の経験を思い出せる人の方が、ちょっと気持ち悪いな、と私は思うんです。錦の御旗、愛国とか国防という言葉を出すと、そういうところがとっても簡単に麻痺していく可能性がある、私は危険だなと感じ

ています。

ともかく、父は 60 歳になったときに献体を決めてしまいました。葬式も要らないと。お坊さんに向かって何を言うかと思ったんですけどね。父の理屈は「自分は非常に稚拙な経験の少ない指揮官として自分のミスで何人もの人間、何人もの部下を死なせなければならないことが何度もあった。その遺体をジャングルに置いたままにして撤退しなければならないことも何度もあった。そういう人間が葬式をしてもらう権利はない」ということです。当時は献体には子供たちのサインが必要だったので、「私はサインしたくない」と反対したんですけど、父はどうしてもサインをしてほしいと言いました。誠実な人間から死んでいく、献体の問題、父が戦争について語ったのはこの 2 回だけです。

もう一つは、父より少し若い父の従兄弟、最後の海軍の士官学校を出た人です。でも、結局戦場に行く前に戦争が終わってしまったんですね。ところがこの従兄弟が、戦争が終わってからも、軍事オタクみたいになってしまい、軍艦の三笠を保存する運動の中心になって働いた人です。この人に対して父はひと言「あいつは戦場に行っていないからな」。これも、父がどういうふうに戦争について考えていたのかということだと思うんですね。

このように、戦後明らかに PTSD を患い、重い経験を抱えたままの親に育てられた子どもたちが、影響がないわけじゃないです。父親を知りたい、なんで父親は何もかもを振り捨てるみたいに会社で働き続けるんだと。現実を、自分の暗いところを見たくなければ、お国のために戦争は終わってない、百年戦争だ、みたいな問いを自分にしながら、命を削って働いた人がたくさんいると思うんですよ。私たちベビーブームに生まれた者の父親はそういう世代だったと思います。そういう世代の人たちが育てた、作っていた家庭、影響がないわけじゃないと思います。私たちが自分の父親がどういう人生を歩んできたのか、父親世代の戦争の影響が、父親の人生、父親の考え方にどういった痛みを残していたのかということ、私たち兵士の子どももきちんと思い出して人に語っていく必要があると思うんです。



戦争の影響は一世代だけではない、次世代にも及んでいるし、その子どもたちにも及ぶ深い傷を残します。皆さんも、自分の父親、母親の経験を思い出して記録にとどめておいてほしいと思います。

このことをなぜ私がお話ししようと思ったかということ、私は 6 年前に慈雲寺に赴任してくるまで 40 年間カナダに住んでいました。通訳やい

ろいろなことをしていました。カナダの日系人というのは第二次世界大戦中に強制収容されています。日本人の血が入っている人たちは強制的に財産を没収されて収容所に送られています。実は、アメリカよりもカナダの方がよほどひどい状態なんです。戦争が終わってからアメリカでは、形式的であろうとも、ある程度の資産が残ったんですけど、カナダの日系人は全部没収でした。

というようなひどいことがあったんですけど、戦後、一世の人たちは、自分たちが悪から、自分たちがカナダ社会に溶け込もうとしなかったからこの事態が起きたんじゃないかと考える人が多かった。西海岸に住んでいた日系人の人たちは非常に優秀な漁業、農業、林業をしている人たちだった。社会のメインストリームに迎えられる人は、公用語の英語とフランス語の人たち、日本語は別にどうでもいい、そういうふうに教育されたのです。戦争体験というのが、2世の人たちの心理状態にものすごい影響を与えているんです。

私は、1世の経験だけではなくて、その子どもの経験もとても大事なんだ、これも語り継いでいかなければいけない、と思いました。話を最初に戻しますが、私は父や祖父に当たる方の抱えてきたものを、もうひいおじいちゃんになるのかな？会ったことある？ひいおじいちゃんの世代の人と話ができなくなる、もうぎりぎりの線ですよ。私たちベビーブームに生まれた私たちも、今語り継いでいかなければなりませんから、自分の家で起こってきたことを、帰ってきた兵士がどういうふうに生きてきたのか、をぜひ語り継いでいただきたいと思います。

ありがとうございました。



会場より質問

叔母夫婦がカナダで収容所にいたと聞いていますし、私の夫のいともバンクーバーに住んでいました。

宮田さんよりのお話

カナダの収容所ではかなりひどい目に遭っているようです。私もバンクーバーに住んでいました。戦後のリドレス（名誉回復）という運動は、3世の人たちが、おじいちゃんや自分の父親母親は、なぜ日本語を話さないのか？自分のアイデンティティーは何なのか？自分のルーツについて考えるようになった時期です。この問題は日本ではなかなか語ることができないですが。

私はとにかく、戦争を体験された親世代が、戦争について何を語ったか、メモっておいてほしいと思っています。次の世代の子どもたちが何も知らずその方向に向かう、危険です。戦争はすぐ隣なんです。どちらか一方を非難し、加担するのも問題だと思っています。私たちは中立、仏教は偏らない中道が教えの基本です。とにかく、今やるべきことは、消えていくものを記録に残すことだと思います。

ぜひ、できるだけたくさん思い出して、自分のおじいちゃんが、お父さん、お母さんが、戦争について何を言い、何を感じたか、戦争が終わってどう思ったか、そういうのがとても大事なことだと思います。

私の祖母は東京大空襲を経験しているんですけど、祖母が言ったのは「みーんな焼けちゃって結構さっぱりした」ということです。「貧乏人もお金持ちも、すっぱり焼け焦げになっちゃって、さっぱりした」って言ったんです。「そういうことは人には言えないよね」って祖母は言いながら。「みんな大変だった、かわいそうだったって話ばかりで『何だかすがすがしい気がした』なんていうことは、大っぴらには言えないよね」と笑ってました。それもとても大事なことです。「大変だった、大変だった。かわいそうだった、かわいそうだった。」だけではなくて、いろいろなことをぜひ思い出してメモしてあげれば、今の小さいお子さんたちの財産になっていくと思います。次の戦争を止める力にもなると思います。

—『死の転進』豹兵団輜重兵第30聯隊の記録—

豹12032部隊戦記編集委員会 発行

戦争体験語り継ぐ会 会員 須原 敏行

1. はじめに

昭和24年(1949)生まれの私の記憶に、“戦争”という体験はありません。ただ、母親が時折口にした戦争体験は、愛知時計への爆撃で堀川が血に染まったことや家が焼夷弾で燃えたこと、病弱な兄(伯父)がシベリアで病死したことぐらいでした。食料に困ったことや空襲の恐怖について話されても実感としてとらえたことは一度もありませんでした。5人の兄弟が鳴海町東部に疎開した話もいい思い出とは思っていませんでした。

戦争の痕跡として認識していたのは、家(南区)の北側に深い穴があって水が溜まっていてごみ捨て場として使っていたことぐらいです。

小学生の頃は、伴淳三郎と花菱アチャコ主演の『二等兵物語』で喜劇風に表現された映画に面白おかしく描かれた兵隊生活を笑って観ていた自分がいたことを覚えています。

しかし、その後、高校生の時、『ひろしま』という原爆被害を映画化した作品にであい原子爆弾の怖さを知り、その後、漫画『はだしのゲン』でその結果どのように庶民の生活が変わっていったかを知り衝撃を受けました。

その後、様々な報道により第2次世界大戦で起きていたことを映像や証言で知ることとなった。経験した人たちが経験した苦難の道を少しでも知りたいとの思いから表記の記録を読むことにした。

この書籍は、戦後40年経った時、生還した人たちの戦地での戦況を述べた貴重な記録である。

※輜重(シチョウ)とは

①軍隊の必需品。軍隊の荷物。②荷車で運ぶ荷物。

聯隊(レンタイ)とは

軍隊の戦略上の単位。三個大隊。

2. 『第30師団輜重兵第30聯隊』とは

昭和18年8月編成完了

聯隊本部(基幹)・・・輜重兵第9聯隊(金沢)、同第2聯隊(仙台)

第1中隊(輓馬)・・・輜重兵第3聯隊(名古屋)

第2中隊(輓馬)・・・輜重兵第8聯隊(弘前)

第3中隊(自動車)・・・輜重兵第6聯隊(熊本)

3. 『第一章 出陣の譜』

2 動員下る 秋乙兵舎の想い出

18年6月、名古屋から平壤・秋乙兵舎に入った。兵舎は高台にボツンと建っていた。営庭は赤土で草木もなく、雨が降れば靴底いっぱい赤土が付着、歩くのに難渋した。桜や芝生を植え、緑が芽生えたころ、動員下令された。

19年4月末から応召の兵員を迎え入れる事務に忙殺された。それでも、簡単な野外での実弾射撃、馬の取り扱い訓練、予防接種、装具の支給と点検、遺書、遺髪、遺爪の寄託といった必要最小限度の作業が間断なく進められた。

第一中隊は将校以下四百六十五名、乗馬は二十六頭だったと思う。全員九六式小銃を携帯、軽機関銃は各小隊に一挺が配備された。そのほか、土工、木工、農耕材料も整えられ、海難対策として全員が利用できる竹筏、タイヤチューブ、縄梯子を出発までに作成した。決戦装備としては完璧に近い準備だったと思う。(1中隊 久野勲一)

在鮮応召者、あの日あの時

主人は京城にいたが、突然の応召に慌てました。福岡の親類に連絡することも出来ず、あの時は「奉公袋も持っていくな」といわれて、まるで会社の出張のような姿で出かけました。(1中隊遺族 大塚せん)

4. 第三章 『アノマル基地周辺の行動』

この部隊は総兵員793人だったそうですが、戦没者は495人(62.4%)、終戦時の兵力は298人(37.6%)に減っていたといえます。

平壤から釜山、門司港からマニラ港へ向かっている途中、台湾東岸で潜水艦からの攻撃を受け、船団が逃げ混乱している状況で、味方同士の船が接触して爆薬爆発、船体の4分の1が吹っ飛んだといえます。この戦闘で約400人が戦死傷されたそうです。軍事用の武器弾薬や貴重な食糧を運搬しようとしてもこのように海の藻屑になってしまう記録だと思いました。もちろん、こうした戦いの結果として何万人の悲しみと苦しみが何十年も続くことにつながっていきました。

この戦争で多くの働き手を失ったため、昭和30年代になっても配給制は続いていました。市街地の焼け焦げた道端や空き地には栽培が容易なカボチャやサツマイモ・大麦などを作っていました。あちらこちらを歩き回って錆びた鉄くぎや空き缶などを集めておいて、廃品集めの人に買ってもらったこともありました。

現在のような多種多様な食品が店頭に並び、いつでもお金さえあれば何でも手に入る時代ではなかったことは確かです。小さな個々の商店では、仕入れる量も種類も限られます。多くの人々は、腹が満たされればよい程度の満足度でした。白米は値段が高く、大麦を多く入れた麦飯が主流で、麦無しの白飯が食べられるようになったのは、いつごろからだったのでしょうか。

白米の配給制が昭和30年代後半になっても続いていて、昭和36年に修学旅行へ行った時、児童一人一人が袋に1合くらいだったと思いますが持って参加しました。戦争の結果、農地が荒れ果てていたことと、貴重な労働力不足などでなかなか生産量が増えていかなかったのもまた、戦争の結果だったと思われる。

この書籍は、戦後40年、生き残った方々の苦しかった時の思い出です。

次ページの抜粋に記述されている通り、『苦しさ、悲惨に満ちていたが楽しい思い出も残り、(中略)あの苦しさ、悲惨さはとても言葉で表現できるものではなかった。』

熱帯の灼熱地獄・スコールのすさまじさ・道なき道を進軍する辛さ・進退窮まるジャングル地帯・連日の握り飯程度の粗食。いかにして副食を得るかが生き続けるための技量となったようです。イチかバチかの試行と試食、まさに命を賭けた食事だったことがわかります。

○赤紙に五月一日の招集としたため有りし夫(つま)のその名も
○召集令状くるとも知らず牡丹台の桜花(はな)めで帰るたそがれの道
○ひとひらの紙にあれども召集令状吾等婦夫(めおと)をひきさく威力
○再婚は恥にあらずと説く夫(つま)の明日は出征く(いでゆく)宿を
○幼児(おさなご)も異常知りてかはなさじとすがりて泣けり出征く父に
○背に眠る子をゆり起こしほおずりぬ輸送列車に乗り征く夫(つま)が
○ただ広くなりたる部屋に児が泣けば夫(つま) 征かしめしのちを耐えかね
(1中隊遺族 祝一校)

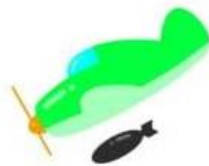
3 決戦の門出

☆5月8日 部隊は動員完結わずか四日後の8日夕、秋乙兵営を出発、同夜、乗船地、釜山に貨物列車で輸送された。乗船準備要員はこれに先立ち、釜山でその任務に就いていた。

ラッパに送られ営門を出る

第1梯団要員は5月8日、日没後、秋乙兵営を出た。
兵団名は「豹」と発表されたが行き先はわからなかった。
毎日、自動車の手入れや縄梯子訓練、予防接種が続ぎ、アツという間に出発の日が来た。
舞台は完全武装で営庭に整列し、その顔は引き締まっていた。
部隊長の簡単な訓示のち営門を出た。
「出発！」の号令と同時にラッパの吹き鳴らす軍樂が響き渡り、胸が躍った。

(3中隊 三重藤雄)



5. 第三章『アノマル基地周辺の行動』

自然に覚えた食事の知恵

3 スガリオ・アノマルの思い出

自然に覚えた食事の知恵

一日に米三合と調味料少々、あとは野草を適宜現地調達せよということになった。しかし、このことは後日、ジャングル生活するようになってから役立った。どの野草には毒があるなど、アノマル時代に自然に覚えた知恵である。

宿営地には日本の里芋をジャンボ化したような地上二メートルぐらいの植物があった。到着第一日、装具を降ろすや否やあちこちで芋掘りが始まった。ところが、この芋は切り口から血のような汁がにじみ出て気味悪いので、ほとんどが食べるのをためらっていた。そこへ勇氣ある一人が飯盒で煮て食べてしまった。猛烈な胃ケイレンを起こし、一きぐらい離れた聯隊本部に担ぎ込んで日高眞軍医のお世話になった。

栄養をとらねば身体がもたないという気分は、初めて熱帯を経験する者の共通心理である。近くの川で釣糸を垂れる余裕もないので、鉱山の作業場からゲランを入手したというのである。ゲランとは青酸カリのことだったようである。

ある天気の良い日に中隊居住区の上流でゲランが使用された。容器を持って集合、かけつけると大量の魚が浮いている。三メートルぐらいのウナギをつかまえた兵隊がウナギにかみつかれたと、はしゃいでいた。内蔵は取り出すようにとの注意があつて、大変ご馳走になった。海でも実験、海水は煮え立つように泡立ち、魚はドンドン浮き上がる。大成功と思つた瞬間、スコールと突風に翻弄され、沖に持っていかれた。

食えない麻の実をバナナと思ひ込んで持ち帰ったところ、上陸していた聯隊本部に笑われたのも、このころである。(2中隊 上田実)

6. 第五章 『9・9大空襲』

1 スリガオ大空襲

スリガオ 大空襲の記録

(前略) 9月9日(土)晴 十四時、飛行機の音に友軍機かと思いきや敵機と呼ぶ者あり。出て見ると、スリガオ埠頭目がけて急降下しあり。落とす。次から次へと爆弾の雨だ。その音たるや全く生きた気持ちではない。初めて見る敵機、そして爆撃だ。真っ黒の煙は天を突く。第二、第三回と敵もなかなか頑強だ。二十一機、二十二機、三十二機と三回だ。

火災が方々で起こる。爆撃時間延べ二時間ばかりだ。友軍の機関砲もあるが全く及ばない。ただ、敵がなすままの爆撃である。

爆撃が終わったので埠頭へ行ってみると、人馬の死体が方々に見られ、弾薬、ガソリンのドラム缶は夜中パンパンと炸裂していた。(中略)

9月10日(日)曇 弾薬は今日もまだパン、パンと炸裂している。(後略)

(1中隊 岡田立身)

転戦するために埠頭に弾薬や糧秣を、日清丸に積載し終わって大休止していた時に突如空爆を受けた時の描写です。24時間以上鎮火することなく誘爆を繰り返す凄惨な描写です。

**1 マライバライ以南を戦場に想定
患者護送中にケリラ**

(前略) 9月20日午後、野戦病院の患者輸送隊(自動車)の警戒班長として先頭車で警戒前進中、スリガオ州バクトの橋を渡り、ジャングルに入る手前で前方から自動小銃で銃撃された。この戦闘で、彦坂計男兵長(愛知県)ら四人が戦死、自分も腕に貫通銃創を受けた。

敵機が飛来しており、地上の警戒が疎かだった。応急手当をしたままで陣地に帰り着くまで、出血が止まらなかった。ここで応急手当を受けたが、麻酔もなく、止血の手術だけだったと思う。あんな痛い思いをしたことは生涯ない。

大内昇上等兵の付き添いで、アグサン河を大発で渡り、野戦病院に入院。手首から切断、ガスエリによる腐敗で七日目に肘関節から、それから十日目に傷口から切断手術した。三回目の手術後、七、八日経った時、空襲を受け、防空壕に入って助かった。その時、病院も爆撃で死傷者続出、移転したが、やがて解散。「近くに原隊あるものは復帰せよ。病院と行動するものはついて来い」といわれ、大内上等兵とともに中隊に復帰した。

(1中隊 高橋孝次)

毎年お正月になると、家族そろって熱田神宮へ初詣に出掛けました。大抵は約2kmの距離を歩いて行った覚えがあります。神宮東門の入り口に必ずと言っていいほど、“傷痍軍人”がアコーディオンを弾いていました。上下白い服で静かに片足で立っていたり、片手がなかったり・・・、前には箱が置かれていて寄金を集めていたのでしょう。無知な私にとってその光景は異様なもので怖ささえ感じました。

しかし、この実体験記を読むと、過酷な境遇を生き抜き、生死の淵をさまよい生還された兵隊さんだったのだと、今、反省しています。人の命を奪ったり、その後の人生を台無しにしたりする戦争のむごさを感じました。

**1 キバウエに物資集積
苦労した幹線道路の補修**

10月1日オモナイに向けてカガヤンを出発した。

10月3日(中略)ミンダナオ島は九州の約四倍の広さがあるとのことだが、南北を結ぶ道路はカガヤン・マライバライ・カバカンを結ぶ一本だけだった。

戦前に開発され、路面も珊瑚礁で舗装され、2車線に整備車輛が配置され優秀な道だったという。

しかし、師団の緊急輸送が開始され、しかも、丁度、雨季にかかり、補修もせずに使い放しである。排水溝もジャングルに覆われ、排水が悪くなっていた。溢れた水の上を容赦なく車が通過する。当然、路面はめくれて、轍(わだち)の跡が深くめり込み、三十センチほど土が盛り上がり、シャーシャーがつかえて車は動かなくなる。その自動貨車を二、三十人の兵隊が太い綱で引っ張る人力作戦が至るところで展開された。

(中略)

中隊の補修器材は円鋸、十字鋸も全員に行き渡らない粗末さだった。その中で、素手で土を掻き、泥をすくって捨てる状態では、手は荒れ、爪から血がにじむだけ。(後略)

(1中隊 久野勘一)

その間に空から銃撃され逃げ惑う。一人が即し、一人が銃創をおったという。十分な食料もなく、治療するための薬品も人手もない中で、ひたすら前進するために苦労していた様子が眼に浮かぶようです。



2 戦場を後に

友軍同士で食糧争奪

(前略) 食糧を求めてさ迷ったあげく、畑を見つけた。立ち入ろうとしたら銃声一発。歩哨が現れて「ここは我々の畑である。勝手に立ち入っては困る。すぐ出て行け」という。われわれの行く先々で畑を占領しているのは全部航空部隊であった。横道から入れば、いつ撃たれるかわからないので、歩哨のまっ正面に近づき「われわれは数日間芋づると木の芽、草の根以外何も食っていない。飯盒に一杯ずつ芋を掘らせて下さい」と、小隊長が哀願したが許してもらえなかった。黙って引き返し、その部隊(航空隊)の手洗い場になっている小川に行き、ネズミの尻尾ぐらいのくす芋を拾い、漸(ようや)く芋づるに混ぜて汁をすった。(後略)

(2中隊 清水周一)

同じ日本人同士でもこのような食糧争奪戦があちらこちらで繰り広げられていたことがわかります。まさに餓死寸前と記述してあります。栄養失調で病気になったり、歩けなくなったりして置いてきぼりにされた兵も多数いたはずで。想像するだけで悪寒を覚えます。

10. 第十三章以降は、食糧事情や逃避生活だけに絞り記述します。

- 各隊の兵隊の多くは食糧もなく衰弱し切っていた。私の小隊はかつての輸送時、米などを少しずつ失敬し、隠していたのか、私の当番兵もかなりの量を持っていた。
- 患者の中でも負傷兵は哀れだった。傷口にウジがわいても治療する者も道具もなかった。棒の先でウジを突き出してやるほかなかった。
- 山に入って一週間目ぐらいだったろうか。「自分で歩けない者は自決せよ」の命令が出たと伝わった。
- ある朝、前夜炊いた飯盒の飯が無くなっていた。騒ぎ出したが、ある自決者が腹いっぱい食って死んでいったことがわかった。
- 最後の配給米は5、6合と塩少々だった。これで半年も1年も命を支えるのかと心細くなった。この米は餓死寸前に食べようと、ふだんは芋づるやトカゲを食べて飢えをしのいだ。
- 生のキャッサバ(芋)をあまりのひもじさに食べて中毒死するものが出たのも、このころだった。その後、キャッサバは5ミリぐらい

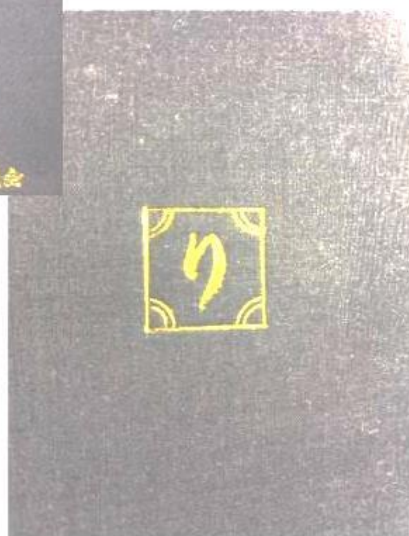
の厚さに切って、太陽に当てると、乾燥して毒性も消えることがわかった。

- 山のヒルは慣れていたが、ここでは、よたよた歩くわれわれの足音と甘い匂いに敏感に反応したのか、ヒルが何匹も先から跳んでやってきた。やせ衰えた身体に吸いつき、彼らにとってはタップリの血の栄養を吸い取るのである。
- 食べられる果物や草木もない。栄養失調者は体力も衰え、目も見えなくなって身体を支えることが出来なくなった。次々と倒れたり、自分で命を絶った。
- 湿気のため水ぶくれした編上靴をスルメのように刻んで、かみ続けたこともあった。脂っ気もなく、味もなかったが、かむことによって唾液が出て、気をまぎらわすことが出来た。
- 川沿いの道では木の枝で蛙をたたいて、そのまま丸呑みにした。小さな巻き貝を見つけると、殻ごと生食した。山地族の廃家では、夕刻になると、天井のハリに群がってくるゴキブリを集めて蒸し焼きにした。ムカデ、ヘビ、トカゲ、土の中の幼虫、動いているものはみんな食べた。名もないキノコで中毒したものもある。
- 途中でサル1頭を捕え、その夜はサルの丸焼きをした。1頭のサルを7人で分けるためには、足4、胴体2、頭1をくじきにし、私には前足が当たった。ジュン、ジュンと音を立てるわが取り分の前足を前に生つばを呑み込んで待っていた。滴り落ちる脂肪が大きな炎になると、もったいないと布切れに吸い込ませ、銃の手入れ用にし、それでもこぼれるものは「スウ、スウ」と口に当てて1滴も無駄にすまいと吸い取った。(中略)皮の部分は携行食にし、骨は砕いて水筒に入れ、火を燃やすたびにスープにし、2、3日飲んだ。

※ 読後の感想

祖国のために必死に生き抜こうとする兵士たちの悲しい記録だというのが偽らざる感想です。一組織として指導者の下ひとつとなり助け合いながら生き抜こうとする一方、爆撃や銃撃、食中毒や疫病、事故等で命を落とす兵士が加速度的に増えていく恐怖。親・兄・弟・姉妹など悲しむ人たちが必ずいたに違いない兵士。

日本国憲法に書かれている不戦・非戦、これは絶対に守らなければならないとの思いがさらに強くなった。



戦争体験語り継ぐ会 主催

豊川海軍工廠跡の戦争遺跡の見学会 記録

2022.11.17.(木)

戦争体験語り継ぐ会 会員 大橋 公雄

豊川海軍工廠は、昭和14(1939)年に海軍の兵器を作るために豊川に造られました。東洋一と呼ばれる規模の工場となり、兵器を作るために愛知県を始め近隣各県の学校から学徒動員されていました。工場には5万以上人の人々が、昼夜とわす3交代で働いていました。工場で製造していたものは、兵器の銃弾、精密な光学機器などでした。ところが昭和20(1945)年8月7日、アメリカ軍B29爆撃機124機による爆撃を受けました。2500名以上が死亡し、1万人以上が負傷しました。

海軍工廠跡地は、平和公園として整備されて平和交流館が建設されました。民間企業に払い下げられたところもあります。一方、跡地の一部は名古屋大学の空電研究所として利用されたため、昭和20年当時の海軍工廠が爆撃を受けた様子を残しています。この跡地は夏季にはジャングルの様になり人が立ち入ることができないため、冬季期間だけ限定的にしか見学ができません。

語り継ぐ会の4名は、公園のボランティアガイドの案内で見学しました。貴重な経験を得ることができたので、写真で様子を案内します。





写真1 平和交流館



写真2 旧第一火薬庫の土裏で覆う



写真3 火薬庫は頑丈な造り



写真4
昭和14年
が銘込ま
れた水道
管



写真5 工場は24時間
3交代勤務のための街路



写真6 銃弾、信管を作る
ためのフライス盤、旋盤



写真7 防空壕跡
こんなチャチな穴に逃げ込んで爆弾を防いでいた

ご案内人:「豊川海軍工廠語り継ぎボランティア」所属 前澤このみさん
「豊川海軍工廠平和公園」
当時の遺構「旧第一火薬庫」「旧第三信管置き場」
「豊川市平和交流館」展示資料・DVD 視聴などあり
「豊川海軍工廠語り継ぎボランティア」登録70名
半日交替で待機・昨年度活動者延べ1443名

戦争体験を語り継ぐ集い

「戦時体験記録集」の歴史 その2

昨年の「戦時体験記録集」の歴史その1では、平成元年から始まった「戦争体験を語り継ぐ」取り組みが、30年以上の活動となった経緯を綴りました。今年は、打ち合わせで語られた思いや、独自の活動の一端を綴ってみたいと思います。

【戦時体験記録集編集へのこだわり】

昨年の記事に仕上げ形式の変遷として、形式的なことは掲載しました。今回は内容の変遷を取り上げていきます。

第1～6集 「緑区民の」という冠が付いていた

戦前、戦中、戦後に、鳴海、有松、大高の地で何があったのか、そこに住まわれていた人たちにはどんな体験があったのか、それを地元の方々にぜひ知っていただきたい、という思いがあった。

第7集以降 「緑区民の」という冠を外す

語り部としてお願いできる体験者の減少と、今後の高齢化も見越し、緑区民という枠を外し、広く戦時体験記事の募集を始める。

第9～23集 表紙へのこだわり

橋詰さんが作成する表紙は、戦時中の記録として貴重なものだった。残されていた戦中戦後の情報を毎年一つずつ表紙として発信していた。読みやすくないが、じっくり見ていただきたい資料である。

第12～15集 諸輪中学2年生の生徒による聞き取り記事掲載

「祖父母たちの太平洋戦争」と題し33名の生徒さんが投稿、数名には発表もしていただいた。担任の先生のご尽力に感謝。

第16集以降 語り部さんのレジメを掲載

語り部さんのお話の内容は、当日別刷りで配布していたが、破棄の可能性もあることから、記録集に掲載することにした。貴重な記録の保存に向けた取り組みである。

第27集以降 前年の語り部さんのお話を記録に残す

語り部さんのお話は、レジメに基づき話される方、レジメは資料として見ていただき他の体験を話される方があった。また、会場

からの質問に答えられる内容も貴重な体験であった。それらを記録として残したいという思いから、翌年の戦時体験記録集へ掲載することになった。録音⇒テープ起こし⇒掲載記事作成の作業を経て、記録として残していく。また、戦時体験記事の投稿が激減している現状もある。

第28集 有松俘虜収容所紙芝居

有松俘虜収容所の様子を描いた紙芝居を譲位した。一人の会員が作成したが、打ち合わせ会で紙芝居を見たもう一人の会員が感動し、二人で上映活動を始めた。2021年の集いでも上映し大好評だった。



第23集まで(第7・8集除く)ふりがなは付けられない 縦書き仕上げ読めないからこそいいんだ。調べることで知識が深まり関心も深まっていくものだ。甘やかすのがいいとは限らない。

橋詰さんの信念として表現されているものだ。第7・8集は、子どもたちが読みやすいようにと「ふりがな」を付けたが、第9集以降付けていない。ここは譲れない思いの場所であった。縦書きの仕上げについても、横書きが大半になってきた時代だからこそ大切にされていた。

第24集以降 時代に合わせてA4版横書きへ変更

橋詰さんから引き継ぎ、時代にに合わせてA4版へ変更した。会員の中には「これまでの記録集を保存し形式が変わるのは困る」という意見もあったが、一新することになった。

仕上げ形式の変遷

第1～5集 A5版(縦書き)

第6集 A4版(横書き)

第7・8集

A5版(縦書き)ふりがな付き

第9～23集

B5版(横長の縦書き)

第24集～今に至る

A4版(横書き)



【打ち合わせで語られること そこから生まれるもの】

打ち合わせの中では、よく戦争の実体験が語られます。

「戦争体験を語り継ぐ会」会員にも戦争体験者がいます。打ち合わせ中も「こんなことがあった」「あんなことがあった」ついつい熱い発言になります。少々中断することもあります。そこから「それをお話して欲しい」という語り継ぎにつながります。

打ち合わせですが、体験していない者にとっては、語り継いでいただく時間になります。その内容から、親を戦争で亡くした会員は、自分の親の状況を垣間見たり、思いを馳せることも多々あります。「いったい戦場では何が起こっていたんだろう」「父親はどんな状況下で生き抜き、どんな死に方をしたんだろう」だれもが、会えなかった、思い出がない、母の苦労を見て育った、その環境に至った「なぜ？」を知りたいものです。話を聞き、遺族会につながり、父親の足跡を辿る旅に出た人もあります。抜け落ちている人生の大切な部分を一つでも明らかにできることはとても貴重なことです。

いつだったか、一回目の打ち合わせが終わった時、新しく参加された方からこんなひと言がありました。「思った以上に真剣に打ち合わせをされているんですね」と。新鮮な感覚でした。体験を語り継ぐ時間になる、情報共有情報交換、時には余談で脱線も、そんな打ち合わせですが、内容は真剣に意見交換をして準備を進めています。

会員ひとりひとりの人生こそが宝であると感じています。戦争体験とひと括りにはできない多様な体験と人生、そこから生み出される豊かさは計り知れないものだと思います。戦中、戦後、次世代の人たち、体験を語る親も語らない親もいます。語らない、語れない、それもまた戦争体験の一つだと思います。

会員のほとんどはそれぞれ独自に戦争反対の活動をしているが、この集いが緑生涯学習センター主催事業であるため、プライベートな活動は情報網や人脈として活かされてきました。政治宗教営業は避け、公の場での活動として協働関係を続けてきています。

毎年の集いで会員を募集していますが、なかなか年齢の若い方が会員に加わってくださることが難しく、会の存続も課題になってくることでしょう。

【忘れられない橋詰語録】

難しいことはない「戦争はイヤ」「戦争は嫌い」それが重要なんだよ
生き残った奴は要領がいい奴なんだ

俺は銃を構えて右目で狙い相手を殺した

だから目が見えなくなっても当たり前前の報いだ

戦争相手国の人も人間だ

陽気な奴らもたくさんいた

親切にもしてもらったから生き残ってこられた

広島では電柱の影から多くの人たちに見送られた

だが、原爆であの人たちは皆死んでしまった

恩返しもできなかった

何もかも凍てつく世界で裸同然で働いた

ていねいに葬ることも許されず、そんな余裕も無かった

体力の無い奴、病人は、捨て置くことしかできなかった

人を人として見ないことでしか生きられなかった

* 橋詰四郎さんは「戦争賛美、自慢話は御法度」を貫かれ「公の場で語り継ぐこと」を重要視されていました。幅広い人脈を持っておられ、語り部を依頼することもお自身で動かされていました。また、依頼したとしても、主旨に合うか、歴史と違ってないかと、内容を確認し、断られることがあったり、手直しを求められることも多々ありました。すべてが「二度と戦争をしない」決意からのものでした。それほどまでに強い柱を持ち、晩年の人生をかけて取り組まれた活動でした。



【戦争体験を語り継ぐ会独自の活動】

◎舞鶴引揚記念館＆復元引揚栈橋見学会

橋詰四郎さんは引き揚げ船に乗り、舞鶴で帰国の一步を踏み出されました。舞鶴への思いは格別なものがあり、晩年に「舞鶴引揚記念館へ行って欲しい、資料館や復元引揚栈橋を、その目で見て肌で感じて欲しい」と、バスをチャーターしたツアーを組まれました。会員のみならず「平和でありたい」と願う関係者も一堂に会する、貴重な機会を作ってくださいました。その時の様子は第25集に綴っています。

◎豊川海軍工廠跡見学会

昨年は会員のご縁により「豊川海軍工廠跡の見学会」を実施し、今回掲載の記事として記録しました。

◎戦時体験記録集の総まとめ編集

戦時体験記録集は今年で30集になります。現在、会員有志で総まとめの作業を進めています。試行錯誤しながら、一步ずつ歩んでいます。完成の暁には、ぜひお手にとっていただけたらと思います。

【文責：荒川淳子】



編集後記

1年以上になるウクライナとロシアの戦争、全世界へと大きな影響が波及しています。昨年、私たちはこのような状況を想像できたでしょうか。

今年の記事には「死の転進」について抜粋部分があります。実体験として特にじっくり読んでいただきたい部分です。また以前にも語っていただき、記録にも残っている「白骨街道ーインパール大作戦」の悲惨な状況も同じくです。

今、似た状況に追い込まれている人たち、追い込まれようとしている人たちがいます。日本では自衛隊員がその状況に一番近い人たちと言ってもいいのではないのでしょうか。

本来は誰ひとりとして、このような状況下に置かれるものではありません。会の打ち合わせでも年々危惧する声が大きくなっています。

この機会に、ひとりでも多くの方が、太平洋戦争における実体験の記録に触れる機会を持っていただければと願います。

私たち日本人は「祈り」という「穏やかな手段」を持っています。「祈りの波動」は地球をさざ波のように包んでくれると信じます。

今年も平和へ祈りと願いを込めて、編集後記といたします。

＜第30集＞戦時体験記録集

令和5年7月29日発行 戦争体験を語り継ぐ集い実行委員会

この冊子は古紙/パルプを含む再生紙を使用しています